

# 2021年 5月 9日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「**幸いな人**」詩編1編 高橋彰

- 1 いかにか<sup>さいわ</sup>幸いなことか  
かみ さか もの はか したが あゆ  
神に逆らう者の計らいに従って歩まず  
つみ もの みち とどまらず  
罪ある者の道にとどまらず  
ごうまん もの ととも すわ  
傲慢な者と共に座らず
- 2 主の教えを愛し  
おし ひる よる くち さむい  
その教えを昼も夜も口ずさむ人。
- 3 その人は流れのほとりに植えられた木。  
ときがめぐれば実を結び  
葉もしおれることがない。  
その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。

- 4 神に逆らう者はそうではない。  
かれ かぜ ふ と 飛ばされるもみ殻。
- 5 神に逆らう者は裁きに堪えず  
つみ もの かみ したが ひと つど た  
罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。
- 6 神に従う人の道を主は知っていてくださる。  
かみ さか もの みち ほろ いた  
神に逆らう者の道は滅びに至る。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会  
Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

2021年度、当教会では詩編23編6節を年間主題聖句に選びましたこともあり、説教でも今年度は詩編をいくつか選んで、お話をします。詩人たちの祈りと賛美の豊かな言葉に触れ、味わい、わたしたちも神との交わりをさらに深めて行けるようにと願います。

聖書は「神の言葉」と言われます。神の言葉と言うと「神からわたしに向けて語られるメッセージ」だと普通は思うわけです。しかし詩編は人びとが神を賛美し神に祈る言葉が綴られています。神への願い、安らぎを求める信頼。病や迫害ゆえの苦しみ。神に見捨てられたと感じずにはいられない孤独さ。嘆き、恐れや不安。神への問いかけを絞り出すような叫び。また、敵について、敵対者への憎しみや復讐の言葉さえもあります。詩編の中には、消えることのない傷みや苦しみ、残酷な行為、悲惨な現実のただ中で打ちのめされている人、その記憶が消え去らない闇の中にいる人がいます。一見驚かされ、衝撃を受ける激しい言葉も、その詩に思いを寄せて祈るように口ずさむうちに、これらの言葉こそが、やりきれない苦しみや怒り、失望の深淵から、声を上げて神を見上げ、その深淵から出ようとする力を持っていることに気づかされる時もあります。イエスが教えられた主の祈りの「**悪より救い出したまえ**」という祈りも、そのように、悪の支配から出ることを求めて祈る言葉です。

詩編の言葉は人から神への祈りや賛美、訴えの言葉として綴られています。わたしたちが神に出会われ、交わりを深められ、対話や対決をさせられ、神の思いへと自分の心が開かされて行く、神との出会いの証言になります。それゆえに神の招きの言葉ともなっているのを知らされるのです。そのようにして詩編は、その言葉を自分も口ずさみながら祈りの世界に入り、神との交わりを始めてゆくものです。神の教えを心に思い浮かべ、刷新されて生きる「**幸いな人**」について詩編の第一編は紹介しています。ある祈りの本に、祈りを、意見を交換し合う「対話」や、仲良くなることに意義があるように感じられる「交流」という表現ではなく、「循環」というイメージで捉えてみようと言われていました。「じっくりと長い時間をかけた交わりがあり、同時に成長への期待がある」という意味で「祈りの世界」のスケールの大きさを示そうというのです。山の中の湖は閉じられていたら水は澱んでいく。しかし流れ出せば合流して川になり、大河になり、海に注ぎ込みます。その水は太陽に

照らされ蒸発して雲になり、雨となって地上に降り注ぐ。そのような水の循環のお陰で湖は澱まずに済む。同じように人の心も閉じられていたら澱む。心にあるさまざまな思いを注ぎし、また外から流れ込ませて、自分以外の存在と心にあるものを循環させることが必要だということです。

詩編1編は「歩まず」「とどまらず」「座らず」と否定の動詞が3回続きます。人が閉じられていないで生きれば常に周りの現実や不条理、自分のなした言動にも直面させられます。神への離反の言動、罪の道、傲慢さはわたしたちの周りにも内にも常にあります。そうした現実の一切を無視したり断ち切る強く正しい人ではなく、翻弄されて苦しみ悩みながらも神を求め、神の言葉と交わりを求め、頼りにして生きる人の有り様を「幸い」(アシュリー)だと言います。イエスが「幸いなかな」(マカリオイ)と祝福を語られた人びと(マタイ5:3-12)の有り様にも通じるものがあると言えるのではないのでしょうか。

3節の「**流れのほとりに植えられた木**」とはまさにそのようなことを象徴的に書いています。命の源泉につながり流れる水を吸収し続けるから、時をかけて実を結び、葉もしおれない。実や葉によって内にあるものを外へと表わしてもゆき、繁栄をもたらします。「**流れ**」は「水路」、人工の灌漑用水を指す語です。そして「**植えられた**」とは自生ではなく移植を思わせる表現です。美しいイメージの背後に、必死に水路を掘りそこに木を移植する労があります。それが2節の「**主の教え(トラー)**を愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ」ということとつながっています。日々繰り返して口ずさみ、心も体もその言葉に根差すのです。ユダヤの民が「律法」(トラー)呼び重んじた五書(創世記～申命記)は、神の「光あれ」という言葉による創造から始まり、造られた世界はすべてが関連し合い「**極めて良かった**」(創世記1:31)と言われます。

木(エツツ)ともみ殻(モツツ)はヘブライ語でよく似た音です。同じ種が、神の言葉、神の義という豊かな水の流れにつながって潤され、木となって時をかけて実を結ぶか、自分の乾いてしまひもみ殻となって風に飛ばされるか。祈りと賛美、神の言葉と礼拝につながり続け、いのちを養う者たちは幸いです。